

名前も知らない「誰か」のおかげで

調布市立第六中学校3年 傍士 夏妃

「税」と聞くと、負担ばかりが注目されがちだ。ニュース番組で税について取り上げられる時、いつも税は人々を苦しめる悪魔のような扱いをされる。だが蓋を開けてみると、出産一時金の支給に医療費の免除、認可保育園の設置、教科書の無償化、道路の整備、年金など考え出したらきりが無いほど、私たちは生まれてから死ぬまで、常に税の恩恵を受けている。そして、税と無関係な人は一人も存在せず、生きている限り税は片時も私たちの側を離れず、活躍しているのだ。

しかし、税が悪魔扱いされていることにも納得がいく。その理由は、所得の多い人ほど税率が高くなる、累進課税制度があるからだ。実は、給与三千万円の人は、五百万円の人と比べると収入は六倍だが、納める税金は約九十五倍にもなる。これより、富の再分配や格差の是正につながるが、頑張った分だけ収入が減るととらえることもでき、労働意欲が減退するかもしれないという落とし穴がある。

では、納税しなければ幸せなのかと疑問に思い、調べてみると決してそうではないと知った。南太平洋に浮かぶ人口約一万人の小さな島国ナウル共和国は、リン鉱石採掘で財を成し、税金が存在しなかった。その上、生活費が支給され、教育や医療を無償で受けられた結果、全体の九割が無職で毎日が日曜日となった。しかし、資源の枯渇とともに約三十年の夢のような楽園生活は終わり、現在は近隣先進国の経済支援に依存している。私は、納税義務を課さずに過保護な経済運営を一時の快樂のために後先考えず行ったことが破綻の原因だと考える。納税義務がないと、「額に汗して働こう」という人間味が失われ、「どうしたら働かずに生きていけるか」を考え続ける墜落した暗い未来が待っていると感じた。

つまり、今の日本が天然資源がなくても豊かなのは、先人たちの血の滲むような努力があったからだ。私たちが税は大人だけが関係していると放り投げて努力を怠れば、先人たちがつないできたバトンを絶ってしまうことになる。そうならないためには、納税の仕組みと福祉や公共サービスという受益がどうあるべきか関心を持ち、理解して、日々の何気ない生活が名前も知らない誰かのおかげで成り立っていることに感謝することが大切だと思う。そうして社会に出た時、きっと私たちは税が「悪魔」ではなく「相棒」と見え、バトンを次につなぐことができると私は信じている。